



新興国で働く経験は 公認会計士としての幅を広げてくれる

3人の公認会計士に共通する経験、ミャンマー駐在。監査はもちろん、各種支援業務などを通じて感じた新興国における仕事の醍醐味や面白さなど、ほぼ同時期をミャンマーで過ごした3人だからこそそのリアルな声をお届けします。

有限責任監査法人トーマツ パートナー 宮下 淳 Atsushi MIYASHITA

2002年有限責任監査法人トーマツ入社、監査部門に所属の後、2007年から2009年デロイトシンガポールに赴任し、会計監査・J-soxのレディネス業務及び監査、内部監査・内部統制改善プロジェクト、日系企業の支援業務を経験。2013年から2015年デロイトタイにて、在タイ及びタイ進出を図る日系企業の支援業務等を経験。2015年からデロイトミャンマーに赴任、ラオス・カンボジアを含む、いわゆるCLM 3カ国の日系企業サービスチームのリーダーを担当。2018年帰任、多国籍展開をしている上場日系企業の会計監査業務等に従事。日本公認会計士協会 国際委員会 会計・監査インフラ整備支援対応専門委員会 専門委員。



矢富国際公認会計士会計事務所 矢富 健太郎 Kentaro YADOMI

2004年あずさ監査法人(現 有限責任あずさ監査法人)に入社し、日本基準・米国基準・国際会計基準に基づく会計監査に従事。その後、アドバイザー事業部に転属し、国内外のM&A関連業務に携わる。2011年よりKPMGバンコク事務所に赴任し、その後KPMGマニラ事務所に駐在。海外では、日系企業の新規進出サポート、現地進出企業の監査、税務、各種アドバイザー業務を経験。2014年8月に日本に帰任し、会計・海外子会社管理アドバイザー業務に従事。2016年にKPMGヤンゴン事務所、会計アドバイザー業務に従事し、2017年3月に独立。主にM&A関連業務、海外子会社管理支援、国際会計基準導入支援に従事。日本公認会計士協会 国際委員会 会計・監査インフラ整備支援対応専門委員会 専門委員。



EY新日本有限責任監査法人 パートナー 三木 拓人 Takuto MIKI

2002年EY新日本有限責任監査法人入社。日本、米国及び国際財務報告基準(IFRS)による会計、会計監査に従事。内部統制関連業務、米国SEC基準による会計監査やIPO、IFRSの初度適用支援業務に携わる。2008年から2011年までEYサンノゼ事務所のJBS及びアシュアランス部門に赴任。日本企業現地法人のほか、米国内上場企業や米国におけるIPO企業等の監査をマネージャーとして担当。2011年から2013年まで日本で勤務、大手物流企業やクロスボーダーIPO企業の監査、IFRS初度適用プロジェクトなどをシニアマネージャーとして担当。2013年から2016年、EYミャンマー・ヤンゴン事務所に駐在。外資系企業のミャンマー進出前の市場・制度調査、M&A関連業務、会社設立・投資許可申請支援のほか、進出後の会計・監査・税務関連サービス等を担当。2016年日本に帰任、監査業務に従事する傍ら、新興国コンサルティング・ミャンマーデスクとして日本企業の新興国進出を支援。2017年よりパートナーとして製造業、メディア&人材サービス企業等にも携わる。



—自己紹介と、海外駐在の経歴をお話しく
ださいますか？

宮下 有限責任監査法人トーマツの宮下
淳です。私は2002年に入社し、2007年
に最初の海外駐在としてデロイトシンガ
ポールに赴任しました。日系企業の会計
監査や内部監査、色々な支援業務を経験
し、一度日本に戻ってきましたが、2013年
に再び海外へ。デロイトタイオフィスで2年
間、2015年からは横滑りでミャンマーに
異動。ラオスやカンボジアを含む、いわゆ
るCLM3カ国に進出する日系企業サービ
スチームのリーダーとして3年間駐在しま
した。2018年に日本に帰任して今に至り
ます。

三木 EY新日本有限責任監査法人の三
木拓人です。私も2002年の入社ですか
ら、宮下さんとはいわば同期。私の海外
経験は2008年にアメリカのサンノゼから
始まります。2011年までの3年間、Japan
Business Services (JBS) の一員として
働いて、2011年に日本に戻ってきました。
2013年からは一転して開国したのミヤ
ンマーに赴任しました。2016年まで滞在
していたので宮下さんとは約1年間共に切
磋琢磨しながら、時には遊びながら(笑)仕
事していました。2016年の6月に日本に戻
り、今は監査業務をしながら、ミャンマーデ
スクとして日系企業をサポートしています。



矢富 矢富健太郎と申します。元々は有限
責任あずさ監査法人に勤務しており、監査
法人勤務時代、タイとフィリピンに駐在し、
日本に帰任後、長期出張のかたちで、
ミャンマーで執務をしていました。その後、
監査法人を退職し独立、今に至っています。

—公認会計士の道を選んだきっかけは？

宮下 大学時代がバブル崩壊後の不況期
と重なったこともあり「何か手に職をつけ
たいな」という前提はありました。大学が商
学部だったことや、叔父が公認会計士だっ
たこともあり、「資格を持って自由に仕事
をするのが自分に合っているかな」という
思いがありました。大学卒業後、しばらくは
バックパッカーとして東南アジアを中心に
アフリカや南米、ヨーロッパなど、色々な
ところを旅行していました。公認会計士試験
は「本気になればすぐ受かる」とタカを括っ
ていましたが、合格するまで3回ぐらいは受
けているので、今の監査法人に入社したの
も27歳の時です。

三木 私は、周りに公認会計士を目指し
ている友人がおり、その話を聞いて興味を
持ったのが始まりです。当時、真っ当なビ
ジネスマンになる自信が持てなかったこ
ともありますが(笑)、いわゆる土業の人た
ちは個性の強い生き方をしている人が多
く、かつ組織で経験を積んだ後に独立して
個人で開業するなどのキャリアも考えられ
ることから「公認会計士は比較的漬しが効
くのでは」と思いました。監査をやるもよ
し、コンサルタントになる道も、企業内
に入るという選択肢もある。そうした幅広
さが魅力的に映り、公認会計士を目指すこ
とにしました。

矢富 大学の学部と大学院の修士課程で、
ヨーロッパやアメリカの近現代美術史を研
究していました。当時は就職氷河期だった
こともあり、自分のバックグラウンドでは、
普通に就職活動をして一般企業への就職
は非常に厳しい状況にありました。そんな
時に同じマンションに住んでいた友人が
公認会計士試験の勉強を始めると聞いて、
漠然とですが面白そうだなと思い、興味を

持つようになりました。また、当時は近現代
美術史の研究をしていた一方で、企業活動
や経済活動にも興味を持っていました。ど
うやってこういったものと接点を持とうか
と考えていたこともあり、資格取得を通じ
てビジネスの知識を幅広く吸収できそうな
公認会計士を目指すことにしました。

—受験時代の当時と今、公認会計士に対す
るイメージは変わりましたか？

三木 監査法人に入社したの頃より今
の方が受験時代に思い描いていたイメー
ジに近いと感じています。例えば、大手の
監査法人に入ると、最初の仕事は比較的単
純作業に近いものだと思いますが、公認会
計士になろうと思う人たちは、マネジメント
についてクライアントと色々な話をしたり、
クライアント企業の中にどういうリスクが
あって、リスクに対応するための方策が適
切でなければ、こういった別の方法も考え
られるのではないのでしょうか、といったアド
バイスをするような仕事を思い描いてい
たのではないかと思います。若手の頃は10
年、15年経った今の方が、当時イメージ
していた公認会計士の姿に近いのかなと
思います。

宮下 私は入りたての頃、監査がどうい
うものかというイメージはあまりありません
でした。例えば、小さい頃から野球が好き
でそのままプロ野球選手になったというの
とは違い、元々やったことない状態から、
つまり、“肌感覚”がないまま仕事に入っ
ていたので、そもそもイメージがありません
でした。だから、理想と違ったとか理想通
りだったという認識はなく、資格を取ってそ
の資格で仕事をしている、という感じです。
実際「これは嫌だな」とか「今日はいい仕事
ができたな」というのは多少ありますが、あ
まりそこに対して、イメージと違ったとか、イ
メージ通りというのはありません。

矢富 受験予備校にあった監査法人や会
計事務所のリクルートパンフレットに載っ
ていたことと、今自分が実際に持っている
イメージはかなり近いです。当時見たリク
ルートのパンフレットには、監査という仕事



が核にあって、会社の数字をしっかり理解して、ある時は中立的に、またある時は企業に寄り添い仕事をする職業で、そういったことを基礎に企業買収・再生の支援や、もっと経営に踏み込んだ助言も行い、海外駐在の経験もできるなど書いてありました。実際に公認会計士になった後の自分と照らし合わせてみても、同じように業務を行っていますし、そうした世界が現実広がっているなど感じています。

ーミャンマー駐在時の印象的なエピソードなどお話しいただけますか？

矢富 私は当時あずさ監査法人と同じメンバーファームに所属するKPMGヤンゴン事務所執務を行いました。国ごとに特性やサービスラインの習熟度にはかなり差がありますが、ただ基本は一緒だったというのが印象に残っています。会計や監査という分野で同一の手法を用いて、同様にアプローチするため、共通のバックグラウンドで話せますし、一緒だなと思いました。

三木 ミャンマーで採用イベントを開催すると、結構な数の応募が来ます。知人の紹介などで応募する人たちも多いのですが、それでも「こんなに来るのか」という感じ。資格試験に合格した人たちの中から採用するという日本のスタイルより、様々なバックグラウンドの人たちが応募してく

るので、面接するのは大変でしたが、「楽しいな」と感じたことはありましたね。ミャンマーも公認会計士制度は昔からありましたが、ご年配や重鎮の方々に比べ、若い層は全く違います。重鎮たちはどちらかというと生真面目な人たちが多くてストイック。一方、若者たちはどちらかというと自由な人たちが多く、結構、実験的なことをやりたがります。ミャンマーは文化的におとなしい人が多いのですが、若い人たちはエネルギーで、なかなか面白く、新しい取り組みをしてみたいとか、仕事を通じてミャンマー以外の国に進出していきたいとか、そんな野望を持っている人が多いのも印象的でした。

宮下 ミャンマーの場合、監査法人に入ってから公認会計士の資格を取得することが一般的です。そのこともあり、監査法人で数年間働いてみて、自分に合わなかったらさっさと辞めていくので、就職に対するカジュアル度は高いです。日本の場合だと、4年制大学を出て、ガチで勉強して、就職も基本的には新卒しか採用しないので、その辺りは違いますね。

三木 転職のカジュアルさはだいぶ違いますよね。法人の間を行ったり来たり、BIG4の間を行き来する人たちも結構いますね。転職して全く関係のない業界に行くというケースもあり、遊牧民のように職を変える人たちが結構多いですね。公認会計士という職業に就いて、何かを経験して、次にステップアップできたらそれでいい、という考え方なのでしょう。公認会計士とは元々そういう職業だという気がします、少なくともミャンマーでは。

ー日本公認会計士協会(以下:JICPA)では、ミャンマーをはじめとする新興国の支援プロジェクトを推進していますが、駐在経験からこの支援事業をどう捉えられていらっしゃるでしょうか？

宮下 ミャンマーには、会計監査において国としてのロードマップがありません。例えば、上場会社を何十年後に何社ぐらいにするのか、どの規模の会社までを法定監査の

対象とするか、それに対応するためには、どのくらいのファームがあって、何人ぐらいの公認会計士がいて、それを維持するためにCPE(継続的専門研修制度)をどうデザイン設計にするか、といったものです。新興国にはロードマップを作るだけの十分な組織力や資力がなく、というのが実情だと思います。会計や監査に関する基準は、国際的なルールをほぼそのまま導入するという方向にありますが、それを現場で使いこなせる監査人を育成していくことが喫緊の課題です。このようにロードマップの形成と短期的な施策のバランスを取りながら改善を進めることができるように支援していくことが重要です。

三木 いわゆる支援、ドネーションで終わるのではなく、相互の関係を活かしてこちら側にもリターンがないと持続可能性に問題が出てくるのではないかと思います。JICPAが支援したモンゴルやミャンマーでも、共通のプラットフォームを整備すると人材の行き来が楽になるとか、そういうことに繋がるとリターンという果実も手にできるのではないのでしょうか。会計や監査は、世界である程度共通の基準やメソドロジーがあるので、スキルさえあれば、正直誰がどこに行っても監査ができるはずなんです。スキルを持った人材の交流がもう少し回りやすくなってくると、繁忙期と閑散期のタイミングに合わせて複数国で会計監査することも考えられます。ひいては、社会全体のコスト低減にも役に立つのではないのでしょうか。

宮下 日本はこれからどんどん人口が減って明らかに経済が縮小していくことを考えると、公認会計士の世界では、会計監査のインフラを輸出しながら経済圏を大きくしないといけないと思っています。駆逐するという意味ではなく、例えば、日本の公認会計士がミャンマーに行って仕事をし、共存共栄してインフラを発展させることで、ひとつの監査経済圏みたいなものが作れるようになっていくといいと思いますね。しかし、しっかりとロードマップがない状態で始めてもうまくいかないと思うので、まず



道筋を作ることが大事かと思っています。

矢富 私も海外に駐在して思ったのは、予想以上に公認会計士の仕事は国を超えて標準化されているということでした。会計にしる、監査にしる、国によっては多少の差異がありますが、基準は国際標準化に向かっていきます。例えば、弁護士や税理士の業域では、業務の拠り所となる法律が国ごとに違うので、その国ごとに固有の仕事が成り立ちます。一方、公認会計士は、現実問題として国際標準化された基準に基づいて業務を行いますので、国ごとの垣根が低いというのが実感です。ただし、監査業務には、国ごとに監査報告書を発行できる資格が、該当国の公認会計士に限定されることが多いため、その意味で国境により分断されています。ただ、一部の国や地域では、監査報告書を発行できる会計士資格を国ごとに相互承認していく動きが進んでいます。この傾向がさらに進んで、一つの国で公認会計士資格を持っていれば、どこの国でも監査報告書を発行できるボーダレスの時代になっていくのかどうか、非常に興味深く見えています。

三木 日本に会計機能を置かない会社も結構出てくるのではないかと考えています。IFRSを適用しているグローバルな会社は、日本語は日本だけで、他の国は全部英語ですよ。であれば、そちらにヘッドクォーターを置いた方が効率的だという考え方もあります。ある日、ヨーロッパの外

資系の会社の方と話をしたら「全世界のアカウンティングセンターを6カ所くらいにしたい」と言うんです。残念ながら、そこに東京は含まれていませんでした。そういうことを考えると、日本ではないどこかにアカウンティング機能をまとめるようなグローバル企業が増えてくると思います。そういった意味で日本国内での仕事が減るかもしれませんが、どちらにしても、我々はそれを追いかけて仕事をすればいいだけの話なので、「どこで誰に対してサービスを提供するのか」という点は柔軟に考えた方がいいかなと思います。

一大切にされている価値観や姿勢などを教えてください。

宮下 できているかどうかは別にして、私が意識しているのは「誠実性」「優しさ」「ユーモア」の3つです。ミャンマー駐在の際は困難な場面が多かったので、「誠実性」を心に仕事に臨みました。当時は駐在員が私一人だったので、妥協しようと思えばいつでも妥協できましたが、「この仕事は自分しかできない」「誰も見ていなくても絶対8時までには会社に行く」と心がけていました。また、「優しさ」は万国共通だと思っています。シンガポールに赴任していた時に、チームメンバーの1人が仕事でミスをしたので、「一緒に謝りに行こう」と上司のマネジャーに言ったことがあります。現地のメンバーからすると「自分は間違っていないのに一緒に謝りに行く」という考えはありませんでしたが、シンガポールから日本に帰任して10年以上経った今でもその方とは仲良く付き合っています。「優しさ」は、国や文化などに関わらず、オールマイティに使えるツール、価値観ではないでしょうか。最後に、「ユーモア」です。ユーモアがないと行き詰まる場面もたくさん出てきます。仕事に限らず、その3つは常に心がけるようにしていますね。

三木 この業界で生き延びている人たちは、その3つは大体持っていますね。「誠実性」がないとなかなか怒ることもできないし、「優しさ」と「ユーモア」は、何となく出会った公認会計士の皆さんにあるように感

じます。集まって話していると、そこは一目瞭然と分かります。

矢富 私が仕事で意識しているのは、「分かり合えない」ということを受け入れることです。特に海外で異なる文化圏の人たちと一緒に仕事する場合、言葉を選ばずに言うと、分かり合えない場面が多くあります。そもそも、生い立ちや文化的な背景が違うからです。そんな時に、無理に分かり合おうとせずに、お互いに分かり合えないことを認め、受け入れていく懐の深さが大事なのではないかと思っています。そうすることにより、より良い信頼関係を築いていくことができるのではないかと思います。

一海外駐在中に印象に残っていることは？

全員 言えないことはいっぱいあります。「言えない」ということしか言えません(笑)。

矢富 フィリピンに駐在していた時のことです。フィリピンもミャンマーに負けず劣らず多くの問題が起きる国で、企業が事業を遂行する上での制度が十分に整っていません。矛盾があったりします。日本だったら「これは何かおかしいよね、どうにかしてほしいよね」で終わってしまいましたが、新興国では「じゃあ変えましょう」と意見をまとめて、政府のしかるべきところに話を通し、自分たちで制度を変えに行きます。駐在している日本人の方々は、気概のある方が多く、こういったことに積極的です。実際、自分も駐在中に支援していた事例で、帰任後になりましたが、制度変更が行われたものがありました。日系企業にとってビジネスの負担がひとつ減り、また、自分としても貴重な経験ができました。我々公認会計士は専門性を挺にして、こういった制度変更を主導し、支援できるチャンスが多くあります。公認会計士として駐在を経験できて良かったなと思います。

三木 ミャンマーでも同様の取り組みがありました。税務当局の方で、実務に興味を持っている人がいて、こちらが「この条項は変だと思う」「この税制おかしいと思う」と言うと、「じゃあどうしたらいいと思う?」「一般的にはどうなっているの?」と質問

をしてくれました。その時に、すごく興味を持って他国の会計税務の専門家を見てくれているなど感じました。新興国の場合、業界自体もまだまだ成立していないところもあります。ミャンマーの場合はまさにそれで、今まで国が閉じられていた中で法定監査をやる公認会計士はいたかもしれませんが、グローバル企業に対してのサービスを提供するようなファームはありませんでした。そういう環境で、土台を作り上げていく段階に自分がいる、というのはすごく面白かったです。若い人たちを採用して、どうやってトレーニングし、一流のグローバルなプロフェッショナルとして育てていくか、その人たちが育ったときに養っていただくのプロジェクトは採れるだろうか、実現可能性を検討したり、他国における昇進制度はこの国でもうまくいくのだろうか、文化的な背景と照らし合わせて検討したりと、そういう機会に巡り会うのも新興国ならではの楽しみです。先進国では味わえない、人生の楽しみです。

宮下 新興国という意味で言うと、大きなプロジェクトに参画できたことですね。国の草創期、初期段階では、JETROやインフラに投資する総合商社を中心にプロジェクトが動きます。会計事務所はリーガルファームと同様に、必ずそのメンバーに入っています。かなり早い段階から、インフラ作りのプロジェクトに貢献でき、プロフェッショナルスキルを使ってサポートできるというのはかなり面白い経験でした。今ヤンゴンに行って、ビルや公園、病院などの巨大なプロジェクトが進行している現場を目の当たりにしたら、「投資規制の観点から実現可能なプロジェクトか、税務上の恩典は取得可能か」といった検討に参与したことを思い出すでしょう。もちろん、投資プロジェクトを検討した結果、やめたケースもありますし、国が手を引いたケースもありました。「国そのものを作っていく過程に深く関わっていける」というのが、新興国の醍醐味でしょう。

矢富 私マネジャーとして海外駐在しましたが、先進国だと仕事内容が確立さ

れているので、マネジャーはマネジャーの仕事をするだけというのが多いと聞いています。他方、新興国ではそういう区切りはあまりなく、マネジャーの役割を超えた仕事ができるというところに、新興国ならではの面白さを感じました。フィリピンに駐在していた当時は日系企業の海外進出が盛んで、フィリピン政府も製造業の誘致に熱心だったこともあり、経済特区に数多くの日本企業を呼び込む機運が高まっていました。当時の経済特区庁の長官は、閣僚の中でも最古参で皆から一目置かれている方でしたが、折を見て意見交換をする機会を設けてくれました。また、長官と一緒に東京、大阪、名古屋に赴き、日系企業に経済特区の魅力をアピールし、売り込むという経験もできました。そういう経験は日本ではできないかもしれません。一介の駐在マネジャーが、一国の産業について議論し、長官と一緒にお仕事できたことは、とても貴重な経験でした。

三木 この職業のいいところは、どの国に行っても、色々な会社のマネジメントと接する機会があること。様々なビジネスのやり方や会社の中の仕組みを見たり聞いたり、ディスカッションしたりできます。例えば先進国では、他の会社でこういうことをやったという経験を念頭に話をすることもあるでしょう。これが新興国に行くときはいきません。「他国の先進的な企業はこういうやり方をしますよ」というのを分かっている我々と、現地で叩き上げてきた企業のマネジメントとは、いわゆるベストプラクティスに関する考え方が全然違います。先進国で実務を積んできた人間としては、「こういったやり方もありますよ」と紹介して仕事を進めることができるという点に新興国に対しての価値を見出しています。規制がない分、新たなスキームも生まれる可能性が高いのは面白いですね。

一様々な国を経験されたプロフェッションとして今後のキャリアの目指すところをお聞かせください。

三木 難しい質問ですね(笑)。私は日本に生まれ育ち、現在日本に住んでいるの

で、しばらくは日本にいてもいいな、と思っています。グローバル化の話もありましたが、日本の企業にサービスを提供する立場である私たちがもう少し、多様性に富んだ働き方ができるようなチームの組成やそのチームを誘引できるようなファームのあり方、そういったものを実現していきたいなと思います。具体的には、すごく難しいですが、今ボトルネックになっているものを取っ払っていきたいです。その要因になっているのは、商慣習や商業に使われる言語が一番大きいと思います。例えば、日本にいてグローバルチームを組成した時真っ先に躓くのが、出てくる書類が全て日本語の書類だという点です。テクノロジーを使い、クライアント自身に対応してもらって乗り越えていけるようになれば、私たち公認会計士もクライアントも一緒に変わっていけるかなと思います。会計ひとつとってもタスクは数多くあるので、「この部分は他のチームの方がより専門性があるので依頼した方がいいのではないか」、「ここは東京本社とのマネジメントに近いところを取りまとめる方がいい」とかやり方は色々ありますよね。タスクに分けて企業内の業務のやり方を提案してあげると、こちらもそれに合ったチームを組みやすくなるなど、業務の進め方の固定概念を突き崩していきたいと思っています。

宮下 私は、日本を出て新興国、できれば東南アジアで監査をしていきたいです。バックパッカー時代、空港のゲートが開いたときに「うわあー、字が全く読めない、なんだこの匂いは!」と感じたことは印象的で、未だにそういった感じが好きです。20年経っても好きということは、本当に好きなのだと思いますが、ただ、新興国に住むということだけを優先して他を妥協したくないので、あえて難関にチャレンジし、自分の専門性をより研ぎ澄まし、新興国のタフな環境の中でも自信をもって監査をやり切れるだけの柱を築いてから、またチャレンジしたいと思います。新興国での生活、家族、自分の好きなものを上手く限界まで採り入れながら、専門性を大事にしたいです。日系企業の子会社の場合、東南アジア



では法定監査が必要なケースが殆どですが、仮にそのような義務がなくなっても、新興国にある子会社の財務諸表や内部統制の検証等をしてほしいというニーズはあると思います。ましてや日系企業の文化等を理解し、日本語でコミュニケーションできる公認会計士が現地にいれば、重宝されると信じています。

矢富 最近の実感は、何かにつけ変化が速いということですね。環境の変化が速くまた不確実なため、今後のキャリアをはっきりと見通すことは難しいです。一方で、そういう状況だからこそ、自分の業域を限定せず、その時々の時流を見ながら業域を広げていく柔軟性や反脆弱性が重要ではないかと考えています。例えば、私が海外駐在に出た2011年頃は日系企業の海外進出・投資（アウトバウンド）の流れが顕著でした。一方、今は、東南アジアや東アジアから日本への進出・投資（インバウンド）の流れが出てきています。日本の人口が減少傾向にある中で、日本人や日本企業だけで日本を支えるというのはなかなか難しくなっており、外国人や外国企業の力が必要になってきているのではないかと思います。実際、私の身近でも、東アジアから日本への投資案件が出てきています。足元では、こういった時流を捉えて、海外からの投資案

件の支援を通じ、微力ながら日本経済に貢献できればと思っています。

—最後に日本の若手公認会計士あるいは公認会計士を目指す学生へのメッセージをお願いします。

三木 世の中は変化しているので、今までやってきたことや、諸先輩が成功した方向に囚われないでほしいですね。興味を持って、自分のやってみたいことがあればやってみればいいし、機会があれば手を挙げてみればいい。どんどん新しいことにチャレンジしていくと、結構楽しいことに巡り会えると思います。大変でしたけど、業界の人に限らず、知り合いや友人もできますし、新興国は結構楽しかったですよ。新しいことに飛び込めるチャンスがあれば、どんどん飛び込んで行ったらいいんじゃないかと思っています。

宮下 「これが大事な」って思うことをどんどん突き詰めて、磨いてほしいですね。監査法人の中にも色々な機会がありましたし、自由に自分の世界を作っていける、それが公認会計士の面白さに繋がっています。

矢富 職業人生は昔よりもはるかに伸びています。東南アジアの大手会計事務所は50代で定年退職するというのがまだ一般

的ですが、それに比べて、日本は60歳だったのが、65歳に伸びて、最近では70歳まで現役でという話もあります。大学を卒業してから、自分の職業人生を全うするまでの期間はとても長いです。また先ほど述べたように、世の中の変化が速くなってきており、キャリアもなかなか一直線にはいかないのではないかと思います。このような環境下で、公認会計士資格は、会計や監査に対する高い専門性という太い幹を持てるため、汎用性が高くとても役に立ちます。私自身、公認会計士であることを基軸として、監査部門、企業買収・再生支援部門、海外駐在、会計アドバイザー部門、独立と転じており、職業人生を楽しんでいます。こんな時代だからこそ、公認会計士という資格を梃としたら、職業人生を柔軟に楽しく歩んで行けるのではないかと思います。

このインタビューは2019年9月6日に実施されました。

 **日本公認会計士協会**
The Japanese Institute of Certified Public Accountants.

〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際グループ)
<http://www.jicpa.or.jp/>